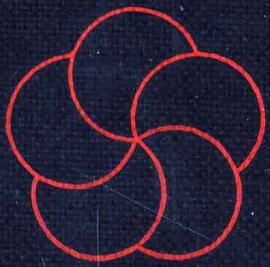
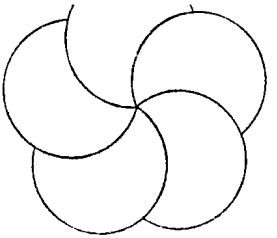
6

日本文学の歴史



文学の下剋上



6 文学の下剋上

日本文学の歴史

岡見正雄　林屋辰三郎 編

日本文学の歴史（全12巻）　第6巻 文学の下剋上

昭和42年10月20日　初版発行

定価 650円

編者　岡見正雄
　　林屋辰三郎

発行者　角川源義

印刷所　中光印刷株式会社
製本所　株式会社 鈴木製本所
製版所　株式会社 高木写真製版所
発行所　株式会社 角川書店

東京都千代田区富士見2—13
振替東京195208番
電話東京(265)7111番

© Printed in Japan　落丁・乱丁本はお取り替えいたします

目次

ばさらの風流　九

鎌倉幕府の最後　中興か内乱か　銭貨の力　自由浪藉の世界　ばさらの出現　「道」の発見　阿弥の芸術　有徳人の文化

下剋上の合戦記　二六

下剋上の世界　『太平記』は下剋上の合戦記　『太平記』の構成　『平家物語』と、『太平記』の距離　作者はどんな人物か　玄恵法印は監修者だったか　『太平記』工房の主、恵鎮僧都　戦乱を描いて、『太平記』とは　欠けていた巻第二十二　『太平記』と物語僧・聖　『太平記』以後の軍記もの

あら面白の都や　五八

山河襟帯の都　賀茂の流れ　花洛の繁栄　下京と上京　京の正月風景　職人尽の世界　四条・五条の辻　京童の笑い

花の下の寄合文芸　七八

花下遊楽　しだれ桜のもとに　物名と賦物・花の座　花の下の指導者たち　時宗の連歌師善阿　土岐の桜堂　京鎌倉をこきまぜて　善阿の門人たち　救済の周辺　北野の神の法楽

『応安新式』の成立　准勅撰の『菟玖波集』　晩年の良基

育ちゆく猿楽　一〇四

鏡の間の神秘　影向の松　幽霊と物狂いの時代　物まねから劇へ　観阿弥と大和猿楽　天下の名望　「中初・上中・下後」人　観阿弥の代表作『自然居士』　俗語を駆使した会話劇
劇的な場面　劇中劇「舟の曲舞」　観阿弥から世阿弥へ

芸と悲劇の語り物　一二六

庶民の文芸語り物　荒ぶる神鎮魂の詞章　幕府の記録に採用された語り物　義経怨霊を恐れた幕府　「しづのをだまきくりかへし」　勝長寿院と『義経記』　霧のなかの義経伝記　時衆教団と義経伝記　義経を神とした神話　『曾我物語』の世界　箱根信仰と唱導文芸　近世文学の源流

北山殿の唐物数寄　一五二

遠国の宝　唐物流行　禅僧と唐物　渡唐天神　禅院茶礼　唐絵と似絵　在京大名　年中行事の成立　会所の出現　会所の文芸

世阿弥の世界　一七八

世阿弥登場　運命の出会い　騏驎児藝若　一期の堺　『風姿花伝』　能の幽玄　花の理
『花伝』を生み出したもの　好敵手増阿　幽玄の深まり　孤高の世阿弥　猿楽狂義教　破滅の時節到来　栄光の音阿弥　思索する禅竹　六輪一露　和歌は能の命　ふたりの名人

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

叢林・林下の文化　二〇四

もてはやされた禅　夢窓国師疎石　禅僧の文化活動　五山十刹の成立　義堂の文・絶海の詩
貴族化する禅僧　ひょうたんなまず　貿易をする禅僧　風狂の僧一休　叢林・林下の末日
禅宗文化の拡散

東山殿の芸術生活　二三〇

トモニツレタル遁世者　たまりん物語　同朋衆の系譜　唐物奉行　公方御倉　二人の千阿弥
山水河原者　東山山荘　唐物から和物へ　有徳者の文芸　勧進能と手猿楽　小京都の出現

敷島の道の終焉　二五六

歌の家のあらそい　北朝再建と二条派の復活　武家と隠者　和歌四天王　頓阿と為秀　風流関白二条良基　吉野朝の悲歌　了俊と耕雲　『新続古今集』と正徹　室町後期の和歌
古今伝授と細川幽斎

連歌会所の宗匠たち　二七八

連歌の神　戦乱の文芸　連歌十徳　一座同心　北野社の連歌会所　連歌会所の宗匠　連歌師宗匠たちの生活　心敬の風躰　宗祇という人　宗祇の生活

猿楽の展開　三〇〇

いくさへの郷愁　権力者の傘の下　武力賛美の能　乱世の中の反乱世　セレモニー用の芸能
となった猿楽　民衆がパトロン　旅する能役者　武士か役者か　アマチュアの能と謡　能
役者豊臣秀吉

戦国乱世と小京都　三三六

乱世に生きる　新しい領主への道　戦国大名の領国支配　領国文化　小京都の成立　大内
氏のばあい　武の世界と都風　文武のかねあいのむずかしさ　小京都の展開　まつりの季節
民衆の中のまつり　風流の世界　風流旋風

町衆の文学・御伽草子　三五二

町衆の世界　いわし売り大名　物くさ太郎の恋　神の親子の苦しみ　神の子の伝説　成功
者と失敗者　耳で聞く楽しみ　お寺での物語　読むための庶民の物語　いくつかの想像

「をかし」の庶民芸能　三七六

狂言の成立　主役になった百姓　太郎冠者の目　笑う者笑われる者　歩み出す太郎冠者
神仏なにするものぞ　俄大名・成出者　流動する狂言　都市と狂言　狂言の終焉

犬筑波の連歌　三九八

俳句と俳人、俳諧と俳諧師　俳諧の連歌から俳諧へ　笑いの文芸の零落　笑いの供給者　笑
いを磨く　『竹馬狂吟集』と『犬つくば集』　俳諧連歌の新しい動き　宗長と宗鑑　宗鑑の
選んだ道　旅の連歌　連歌師のユーモア教本　宗鑑の次代

「ただ狂へ一期は夢よ」　四三〇
新しいうたごえ　花の下月の前の宴　『閑吟集』と連歌趣味　タフガイ・宗長　インテリ僧
侶と流行歌　芸謡時代の到来　廻国の芸能人　恋愛謳歌　洛中のあだ花たち　遊び女の哀
歓　生活の詩　人の世の憂きと浮き　おもしろの春雨や

近世の序奏　四四八
近世の日本　軍記文学の末流　天下布武　尾張という土地　愚直な武士の記録　乱世の英
雄像　事績の記録に終止　記録文学の長所と弱み　近世封建制の産婆役秀吉　お伽衆の文章
『天正記』の限界　秀吉の時代意識　儒教道徳の人物論　『太閤記』の役割　黄金の世界
花ひらく文学サロン　近世の幕あき

特集・『太平記』物語　四六
天皇御謀反　正成登場　巻き返す親王勢　鎌倉幕府の最後　建武一朝の夢　護良親王と尊
氏　尊氏の隆替　正成存命無益なり　後醍醐天皇の逝去

参考文献　四七六
日本文学年表　四七八
あとがき　四八七

装幀　大森　忠行

執筆者（五十音順）

伊地知鉄男　伊藤正義　植木行宣　小笠原恭子
岡見正雄　角川源義　北川忠彦　島津忠夫
鈴木棠三　長尾一雄　長谷川端　林屋辰三郎
福田秀一　武者小路穣　村井康彦　脇田修

本巻協力者

今井尊子　牛窓隆司　岡田利兵衛　観世元正　菊地康明
葛西宗誠　金剛巌　笹川祥生　茂山千五郎　杉浦勝
杉山博　武田恒夫　田中穣　堂本正樹　中西進
中村保雄　前登志夫　前西芳雄　三井八郎右衛門　峯田義郎
吉越立雄

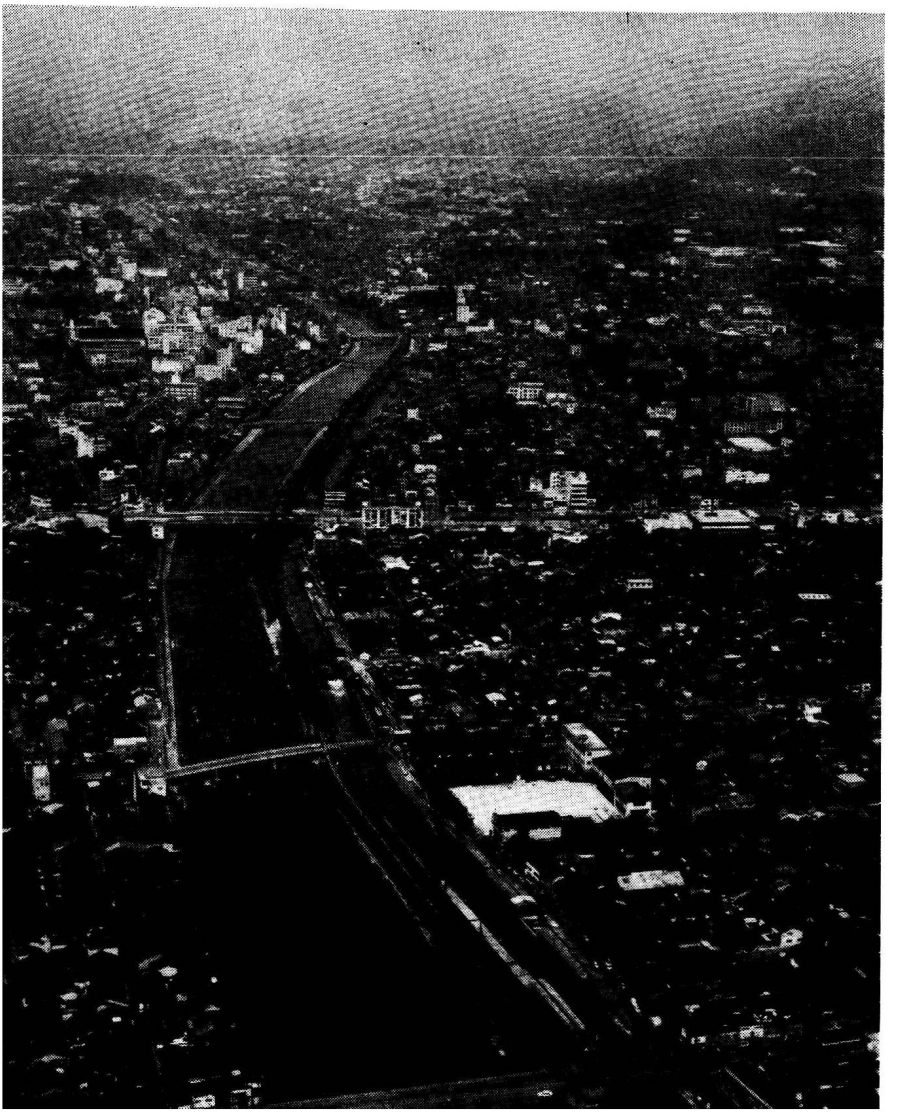
梅若能楽堂　観心寺　三時知恩寺　北野天満宮　京都国立博物館　宮内庁書陵部　杭全神社　金剛寺　淡交新社　東京国立博物館　東京大学史料編纂所　常盤山文庫　奈良国立博物館　長谷寺　湊川神社　明治大学図書館

写真特集

甲冑と合戦に見る南北朝　24
楠木正成のふるさと　56
洛中屏風職人尽　76
連歌と天神信仰　102
能の仮面　124
北国落ちの義経伝承　153
公方書庫　176
佐渡の世阿弥　202
室町時代の庭園　228
金閣と銀閣　254
悲歌の舞台　276
連歌師と旅　298
能の作法　324
祇園会・今と昔　350
御伽草子絵　374
狂言にみる職業人　396
犬筑波の世界　418
中世の芸能者　444
戦国時代の城　446

文学の下剋上

下京を望む　ほぼ中央に五条橋が見える



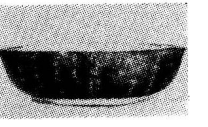
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

ばさらの風流

鎌倉幕府の最後

鎌倉幕府に動揺がきざしはじめたのは、蒙古襲来が終わってからのことであった。この国難は、いちおう切り抜けることができたが、このために幕府がうけた財政上の負担は、その後もながく残された。なかでも御家人とよばれる幕府直属の武士たちは、日宋貿易がひらかれてのち、やむことなく所領のなかに浸透してくる銭貨のために、生活の向上と家計の窮乏という収支の不均衡に悩まされていたが、蒙古襲来の財政的負担を分かち合うなかで、その窮乏を、ますますはげしくしていったのである。そこで幕府としては、永仁五年（一二九七）に徳政令を発布して、借財に苦しむ御家人を救済しようとした。徳政令とは、所領の売買を禁止すると同時に、すでに売却されたり、入質されたりした所領を、もとの持ち主に無償で返却し、また貸借に関する訴訟はいっさい受理せず、事実上は借財を棚上げにするというものであった。ところが、その結果はどうであったか。彼らはそのためにかえって金融の道を絶たれ、いっそう悩みを深める結果に終わった。こうして幕府に対する政治的不満が増大するのに応じて、幕府はその対応策として、いよいよ執権の独裁的方向をつよめ、御家人をしてますます幕府から離反させてしまった。北条高時は、このような状況をよそに田楽・闘犬のあそびにふけり、その失政は、ついに内乱への導火線となったのである。

鎌倉に対して京都では、後醍醐天皇が天皇親政の理



後醍醐天皇奉納の銅鐘
（日光輪王寺）

笠置山　後醍醐天皇を笠置山に迎えた宮方は，山の四方を北条勢にかこまれながら善戦した。この笠置の城塞戦は，鎌倉から南北朝・室町時代へ，古い時代から新しい自由狼藉の時代へと転換していく，歴史の重要なひとつの歯車となったのである。写真は，笠置山を南方からみたもの。上部に木津川がみえ，手前南方へ柳生街道が走っている。

水銀を掘っていた正成

元弘元年八月のこと、笠置寺にのがれた後醍醐天皇は不思議な夢をみた。紫宸殿の前庭にある一本の大樹の下に二人の子どもがやってきてひざまずき、「この広い天下で、天皇をお迎えできるのは、ここばかりになりました」と言ってさめざめと泣いたというのである。夢からさめた天皇は、これをうらなわせて、楠木正成の存在を知ったという。有名な正成忠勤の発端である。ところが、この正成の正体は、戦後の多くの学者の努力にもかかわらず、さっぱりわかっていない。正慶元年の文書によって、彼が「悪党楠木兵衛尉」として、河内の国（大阪府）の土豪らしく思われるのが、正成の前身を知ることのできる唯一の確証である。

そこでさまざまな想像がたくましく行なわれている。たとえば一説では、赤坂が辰砂（水銀と硫黄の化合物）の産地であるところから、正成を水銀掘りの採掘権をもつ長者と考え、またあるいは、一種の賤民を組織的に支配していた散所の長者と考えられたりもしている。いずれにしろ正成は、既成の鎌倉武士の系列から一歩外にはみだしていた新興武士の典型なのであった。

想をめざして、まず院政を廃止し、ついで幕府の動揺をついて討幕の計画をめぐらしつつあった。だが、その企ては正中の変（一三二四）、元弘の変（一三三一）と、いずれも事前に発覚して、志をとげることができず、後醍醐天皇も京都をのがれて笠置に脱出、さらには捕えられて、隠岐に配流されるなどの苦難をなめた。しかし、そのあと護良親王や楠木正成の活動によって、討幕運動はしだいに活発となり、後醍醐天皇も伯耆（鳥取県）の名和長年に迎えられて船上山に挙兵、播磨（兵庫県）の赤松則村、肥後（熊本県）の菊池武時らがこれに応じて蜂起し、ついには幕府の内部からも上野（群馬県）の新田氏、下野（栃木県）の足利氏らが反旗をひるがえした。こうして高まる内乱のけはいのなかに、鎌倉幕府は倒れ、建武新政府が樹立されたのである。

流寓の天子　後醍醐天皇。即位の3年後29歳の北畠親房を起用し親政を開始した。討幕計画の失敗により隠岐に配流されたが，のち鎌倉政権瓦壊の後，建武の中興政治を推進した。新政はやがて破綻し，天皇は吉野に走り南朝政権を樹立。延元4年，王政復古一途に生きた多端な50余年の生涯を僻遠の地に閉じた。遺言にしたがい，京を望み北面して葬られた。図は大徳寺蔵。

中興か内乱か

ここで注意しなければならないのは、この倒幕運動に参加した者の目標が必ずしも一つではなかったことである。

一つには公家一統の政治といわれる天皇親政の実現をめざす貴族の人々があったことはたしかであろう。しかしそれを支持する武力についてみると、源氏の伝統的な武者として朝廷の武者所のもとに武士団の組織を考える新田氏のようなのもあれば、彼らからは卑賤視されながら摂津・河内・和泉の要衝に異常な組織力をもつ楠木氏のような存在もあった。

さらに一方には、北条氏を中核として独裁化した鎌倉幕府を打倒し、新しく幕府を再編成しようとする足利氏のような考え方もあった。また他方にはこうした武力に組織された農民たちの側に立つと、彼らは彼らなりの考え方によって倒幕運動を押し進めていた。彼らにしてみれば王朝が復活しようが幕府が再編成され

名和長年　南北朝時代の武将。後醍醐天皇の隠岐脱出にあたって、伯耆船上山に迎え、以後一貫して忠勤を励んだ。延元元年、尊氏の兵が再度京都を攻めた時、これに応戦して敗死。図は名和長年像で長谷川信春が青年時代に描いたもの。戦国武将らしい風貌は硬骨漢長年にふさわしい。（東京国立博物館蔵）

ようが、しょせん満足できるものではなかった。彼らとしては一郷一郡、さらには一国という形での惣的結合を実現し、窮極には国一揆という形での政治体制を樹立することこそがその努力目標であった。それは確固としたイメージとしては描かれないまでも、漠然とした理想として存在していたと考えられる。

要するに、貴族・武士・農民という各層が三者三様の立場とおもわくによって、当面の相手を北条の執権政治にしぼり、これを倒すべく抗争を続けたのが討幕の本質であったといえる。そして、それをさらに二つの見方に類別すれば、第一のばあいは討幕の成功とともに建武新政府が誕生し、その段階をもって、いちおう歴史の達成とみる中興史観といえるし、第二、第三のばあいは、新しい体制を守護領国制の形成のうちにとらえ、さらには百姓の国の成立を土一揆の展開のなかに求めようとする意味で、内乱史観といえる。そして、かつてその倒幕運動の結果と考えられた建武の中興について、それがいったいなんの中興であったかを吟味するならば、そこには民衆の歴史とはなんら関係のない事実を見いだすにすぎない。それに反してこの倒幕運動に始まり、南北朝の抗争を過ぎて、さらには室町時代を通ずるこの社会変動を正しく内乱としてとらえることによって、はじめてこの時期の正確な姿が浮かび上がるであろう。

銭貨の力

このようにさまざまな期待をはらんで、政治的指導権が争われる。その根底に、国家権力の不安定にもかかわらず、社会全般の経済機構に大きな変動があらわれようとしていたことは、注目に値する。鎌倉時代いらい農業技術の進歩につれて農業生産力がいちじるしく高まり、余剰生産物の商品

化も予期以上に進んでいたからである。そして、さきに述べたような日宋貿易にともなう、宋銭の流入も、そのことに拍車をかけた。こうして、そこでは商品・銭貨など富の蓄積がいまや、古代的権威に対してはもちろん、武力をも圧倒するような時代が近づいていたといえよう。

……人の世にある、自他につけて所願無量なり。欲に随ひて志を遂げむと思はば、百万の銭（ぜに）ありといふとも、暫くも住すべからず、所願はやむ時なし、財は尽くる期あり……銭を奴（やつこ）のごとくしてつかひ用ゐる物としらば、ながく貧苦をまぬかるべからず、君のごとく、神のごとく恐れたふとみて、従へもちゐることなかれ

これはちょうど、このころに成立したといわれる『徒然草』のなかで語られた大福長者の述懐である。

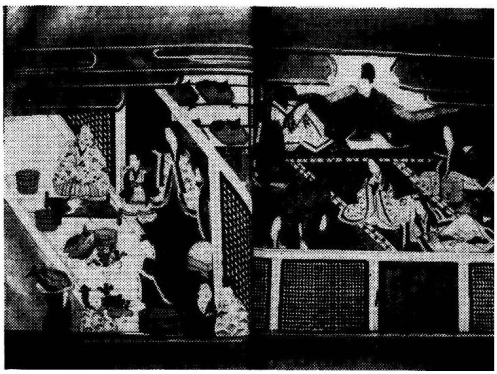
この世に生をうけた以上、人は限りない欲望にかられるものであり、欲につられて富をふやそうと思えば、百万の銭があっても満足せず、欲望はやむことなくひろがっていく、と語り、銭を奴隷のように、むやみに浪費するものと考えたら、いつまでも貧苦の悩みから

尊氏の実力

足利尊氏、新田義貞といえば、名にしおう南北朝の実力者である。わけても尊氏を逆賊とみなした戦前の史観では、義貞株は圧倒的に高かったようだ。だが、どうやら事実はまるで逆のようだ。その例証ともいえる話を『太平記』は次のように伝えている。

元弘三年五月、義貞の率いる大軍は、倒幕を目ざして鎌倉に迫っていたが、その時、尊氏の嫡子でまだ四歳の千寿王（のちの義詮）を輿にのせたわずか二百騎の足利軍がこれと合流すべく武蔵からはせ参じた。幕府が倒れ、戦火が治まってみると、二階堂に陣する千寿王の軍勢は、なんと義貞の軍勢をはるかに凌駕していたという。ひとり歩きもままならぬような若御料を擁した弱小勢力が、一夜明ければこのありさまである。いかに尊氏声望の大なるかがわかろうというもの。

そういえば、同じ源家の流れをくむとはいえ、尊氏は、それより二年後の正慶二年、二十九歳にしてすでに三河、上総の二国を治め、従五位上、前治部大輔であったのに対し、五十二歳の義貞は無位無官、ただの「小四郎」にすぎなかった。



長者の優雅な生活　豊後の国内山の真野の長者は子のないことを悲しみ，聖観音に祈って王世の姫を儲けた。図は姫を育てている座敷の風景。用明天皇がのちに姫の美貌を耳にし，九州に下って長者の牛飼いとなる。宇佐八幡の放生会に流鏑馬(やぶさめ)をみごとやりおおせて首尾よく婿となる。幸若舞曲『烏帽子折』の絵草子から。

のがれることができないから、主君か神のようにおそれたっとんで扱うべきだ、として銭貨の貴重さを説いている。

銭貨の力を知った人々が、それをどのように生かすかは、当時、まことに大きな課題であったわけだが、こうして銭貨は、社会のなかに、いよいよ貧富の差をきびしくすると同時に、かつてない新しい力をもたらしたといえるだろう。この内乱期に立て役者として登場する人々は、すべてなんらかの形でこの銭貨の影響をうけていた。

自由狼藉の世界　建武元年（一三三四）八月、二条河原に落書が行なわれた。

此比都ニハヤル物
夜討強盗謀綸旨
召人早馬虚騒動
生頸還俗自由出家
俄大名迷者
安堵恩賞虚軍
本題ハナルル訴訟人
文書入タル細葛
追従讒人禅律僧
下剋上スル成出者
器用ノ堪否沙汰モナク
モルル人ナキ決断所

落書冒頭のひとくだりである。そこには建武新政府への痛烈な批判と世相への風刺が、いかんなくもりこまれている。

建武元年といえば、新政二年目の年である。恒良親

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com